

2022年度(令和4年度)学校評価自己評価表

城南中学校区	校番	福山市立川口小学校
最終更新日		2023年(令和5年)2月13日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	課題発見する力(課題を見つける) 対話する力(コミュニケーション) 認める態度(人としての思いやり)
- コロナ禍でも、対話し自分の考えを深めることを大切に取り組む姿勢がよく伺えた。 - 自ら考え、学ぼうとする力を高めていくため、生徒一人一人を大切にしている様子が伺える。 - コロナ禍でもできることを積極的に実施してほしい。	- お互いの意見を尊重しながら、自分の考えを深めたり広げたりしている児童生徒が増えている。 - 日々の授業や行事等を通して、児童生徒自身が、学び方を考えたり、企画等を考え・実行したりしている。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	- 自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる児童生徒 - 様々な課題を自ら求め、お互いの意見を尊重しながら対話による課題解決を図る主体性を持つ児童生徒
		中学校区として統一した取組等	○「学校・子どもはこうあるべきだ」といった価値観や固定観念を問い直す ・多様な価値観で子ども一人一人の学び姿をみる。 ○自分が“考えて、決める、選ぶ” ・自分で方法を決めて課題解決に取り組んだり、議論したりする。

III 自 校

ミッション	
・ 子ども一人一人の個性を尊重し、だれも取り残さない。 ・ 子どもとともに決める	
学校教育目標	
自他を認め（思いやり）、自己決定できる児童の育成	
現 状	
＜児童＞ ・ 年を追うごとに児童が落ち着き、「自己決定」し、社会性が身についている。また、文化や身体的状況等さまざまな児童を認め合える風土が出来てきている、 ・ 高学年の教科担任制の導入等で組織として児童をみることができ、児童の課題は職員で全体共有してかわることができている。 ・ 授業の中で「認知」を意識した授業展開を試みだしているが、まだ教師主導の場面も多い。	
＜地域・家庭＞ ・ 学校教育推進に協力的である一方で児童よりも保護者対応に苦慮する場面も多くある。	

育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	・ 課題発見解決力（自己決定） ・ 対話する力（コミュニケーション） ・ 認める態度（思いやり）	
めざす 子ども像	課	明確な目標をたて、その目標にせまる学び方を自ら見だし解決に向けて方法をさぐる。
	対	課題や問題解決のために自己の経験などから意見を伝えたり、他者と対話することで考えを評価したり、深めたりして互いの考えを生かし合う。
	認	自己の考えや思いについて自信を持ったり認めたり、他者の思いや立場を尊重し、互いに高め合うことができる。
研究	教科等	国語科、外国語（外国語活動）
	主題 内容等	主体的に自分の考えを表出する児童の育成 ～選ぶ・決める授業を通して～ すべての授業で何を問うているのかを見つけ、対話し、その問いに対して自分の考えを表出できるようにする。
めざす授業の姿	「子ども主体の学びづくり」 ・ 自分たちで学びの課題及び手法を選んだり、考えたりする ・ 他者と対話することで考えを深める ・ 課題について考えや思いを <u>しっかり書く</u>	

福山市立川口小学校

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年 目	中期経 営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	70% 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70% 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	自分の考えを表出することができる児童	★	継続	自分で問いや課題を選び、自己表現できる(書く・対話など)の児童の割合を80%以上にする。	①基礎学力の定着を図る学力補充時間(くすのきタイム・チャレンジタイム)の実施 ②問いや課題を見つけ、考えを表出する授業の実施	①学期末テスト45%未満の児童を昨年度より減らす。 ②児童アンケートにおいて「自分の考えを書いたり伝えたりすることができる」と回答する児童の割合を80%以上にする。	①昨年度学期末テスト 45%未満の児童数 82 名に対し、今年度 1 学期末は 52 名だった。取組としてチャレンジタイムを5月1回、6月1回、7月1回行った。 ②児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は、83%だった。取組として、振り返りに観点を持たせ、自分の学びを再構築するようにした。	3	3	①引き続き基礎学力を図る学力補充(くすのきタイム・チャレンジタイム)を実施し、45%未満の児童の人数を減らす。 ②今後の取組として、「ふりかえりの達人」を提示し、自己表現のよい例を示し、書くことのよさに結び付けていくように実施していく。	◎自分で問いや課題を選び、自己表現できる(書く・対話など)の児童の割合が80%であった。達成率は、100%であった。 ①昨年度学期末テスト45%未満の児童数 88 名に対して、今年度2学期末は、67 名だった。取組としてチャレンジタイム計6回を行った。また、授業の中で対話できる時間や場面を確保した。 ②児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は、83%だった。取組として、「ふりかえりの達人」を提示したり、ふりかえりの達人表彰を行ったりした。そのことにより「書く」ことを意識づけることができた。	3	3	3	・授業の中で45%未満の児童学びに向かえるように対話の場面を設けたり、問いを選択したりできるようにしていきたい。また来年度も基礎学力を図る学力補充時間(くすのきタイム・チャレンジタイム)を実施していく。45%未満の児童には、くりかえし学習を行い、基礎学力が定着していきたい。 ・自分の考えを書いたり伝えたりすることができる児童が増えてきているが、今後は対話や書くことの質をあげる取組を考えていく。
4	自他ともに認め合える児童	★	継続	長期欠席児童(年間の欠席日数が30日以上)及び不登校児童の人数を昨年度より減らす	①自己有用感を育成し、協調性を育てるために、「がんばりみつけ」を行う。 ②児童の居場所づくり及び「自己決定」の場として「ロングタイム大休憩」を月に4回以上行う。	①児童アンケートにおいて、「自分にはよいところがある。」と回答する割合を90%にする。 ②児童アンケートにおいて、「学校では安心して過ごすことができる」と回答する児童の割合を85%以上にする。	①児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は93%だった。取組として6月に1回、9月に1回「がんばりみつけ」を行った。 ②児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は81%だった。取組として5月から7月、9月にそれぞれ月に4回行った。	3	3	①がんばりみつけの内容を学年の実態に合わせて変えるようにする。また見る範囲もクラスから学年・学校全体と広げていくように指導していく。 ②1学期最後に学級力向上アンケートを行い、その結果の見方と活用の仕方について夏季研修を行った。またクラス会議(※)に関する研修を行い2学期以降全クラスで実施していく。	◎長期欠席児童及び不登校児童の人数は昨年度12人に対して今年度は7人だった。 ①児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は94%だった。取組として2学期に2回、3学期に1回「がんばりみつけ」を行った。 ②児童アンケート集計の結果、肯定的に答えた児童は93%だった。ロングタイム大休憩は月に4回以上行った。2学期に全クラス1回以上クラス会議を行い、冬休みに研修を行った。	3	3	4	・がんばりみつけを児童会活動の取組としても行い、期間限定の実施ではなく年間を通して実施していく。 ・3学期末にクラス会議の取組をふり振り返り、来年度の実施に生かしていく。
3	心身ともに健康な体作りにはぐくみ、たくましく生きる		見直し	健康な体作りに営む児童を80%以上にする。	①残菜を減らしていく。 ①昨年度より残菜量を減らす。	①2021年度と2022年度の残菜量を比較し、2021年度は0.19%に対し、2022年度は0.12%であった。	①2021年度と2022年度の残菜量を比較し、2021年度は0.19%に対し、2022年度は0.12%であった。	4	4	・各クラス、栄養士を中心として、食に関する授業を行ったり、児童の机の上に給食が運ばれるまでに給食技術員がど	◎健康な体力づくりに営む児童は90%であった。達成率は113%であった。 ①2021年度と	4	3	4	・食に関して興味・関心を持てるようにするために、食のクイズを作成・放送したり、担任の丁寧な声掛けを行ったりし

※クラス会議・・・子ども達が話し合いを通して、人との関わりを増やし、困難に立ち向かう力（レジリエンス）を高めることを目的とした活動。